
午前 2 時

doubter

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午前2時

【Nコード】

N5971E

【作者名】

doubter

【あらすじ】

暑い、暑い！暑さのせいですっかり眠れなくなってしまった青年の瞬間の心を描く、作者も寝れなかった時の物語

その日の夜はとても寝苦しい夜だった。

午前2:00

なんて事はないただの夜。そんな中、筈夜は起きていた。正しくは「起きてしまつて寝れなくなった」だが、本人にしてみればどちらも同じ事だった。気温25度をわずかに下回っていて、熱帯夜の称号こそ逃したが十分寝苦しかった。なにより、7月の頭の気温としてはけっこう高いものである。その気も無しに今はベランダにいた。「あ、つづく。もういつそここで寝てえ」

特に誰に向けた訳ではないただの独り言。しかし一人暮らしの彼には元から返事を期待してはいなかった。部屋の中を見れば男の一人暮らしの部屋としては割と片付いているがやはり散らかっていて、余計に暑さを感じさせた。気温も確かに涼しかったがああ暑苦しい部屋に戻る気がしない、それが筈夜のベランダに居る理由だった。

そんな退屈な時間をしばらく過ごした。腕時計もはずし、携帯電話も部屋にあるのでどの位時間が経ったのか分からない。暑さは時間の感覚まで筈夜から奪つていたらしい。

「喉…渴いたな。小銭は… ああ、あつたあつた」

散歩がてら自販機でジュースでも買って来よう。そう思い、着ていたTシャツを脱いで簡単に着替えた。見た目的にはそのまま出かけてもよかったのだが、あまり落ち着かないし汗ですっかりベトついていて気持ち悪かった。

「よし、じゃあ行きますか」

また誰にでもない独り言。今回は寝具のベトつきから解放されたという事でやや元気だった。もうすっかり眠気はない。むしろ彼

は寝るといふ選択肢さえ忘れていた。

現代というのには便利なもので、道を歩けば5分以内に自動販売機が見つかる。別に探していなくてもだ。今回もご多分に漏れずものの3分で目的地に着いてしまった。ここまでの道のりは無性に暑く感じられた。夜はやたらに涼しくなるらしい砂漠に八つ当たりしたかった。

ガタン、自動販売機からあの真つ黒な炭酸飲料の落ちる音が響く。思っていたよりも大きな音がして筈夜は少しばかり驚いた。「しかし、なんでこんな暑いんだ？」

そうばやきながら自動販売機の中の炭酸飲料を取り出す。なんだよ、思いつきり常温じゃねえかよ

筈夜は心の内で悪態を衝きつつも、散歩を長引かせる口実ができたと思っていた。もちろん、誰に言い訳するわけではないし、その必要も無いのだが

ふと、何の気もなしにアスファルトの上に寝転がってみる。見たのはそこら中に張り巡らした電線電話線と淀んだ空だった。空はとても汚れていて、もし匂いがあるならばへドロの匂いがしそうだった。よく分からないがただ曇ってるだけかもしれない。しかし、筈夜にはそうは思えなかった。空が青くてきれいななんてのはもう信じられなかった。誰かがペンキで着色している、そんな訳ないと分かっているけれども、そのイメージが頭から離れなかった。

ハア

ため息をついて、起き上がった。筈夜は煙草は吸わないが、ため息のつき方はヘビースモーカーのそれに似ていた。大分長い時間横になっていたのだろうか。背中はいつきり叩かれた時のようにジンジンと熱をもつて鬱陶しかったし、脇に置いておいた炭酸飲料はぬるいを通り越してやや熱い位だ。いずれにしても、もう飲めたものじゃない。

「もういいや。帰る」

そう言っただけでまだ一口も飲んでないペットボトルをそのままゴミ箱に入れて帰途についた。もう一ヶ所自動販売機を探してもよかったのだが、もはやそんな気分ではなかった。帰ってもまた寝れないのだから、それもどうでもよかった。

ただあの偽物で、汚れた空に見下ろされながらは歩きたくはなかった。

(後書き)

初めて短編を書きました。うーん、少し短いですねw
勝手が分からないので、感想などでご指摘やご指導頂けると嬉しい
です。

連載のお暇書き!!もよろしくお願いします!

以上、doubterでした!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5971e/>

午前2時

2010年10月11日19時22分発行